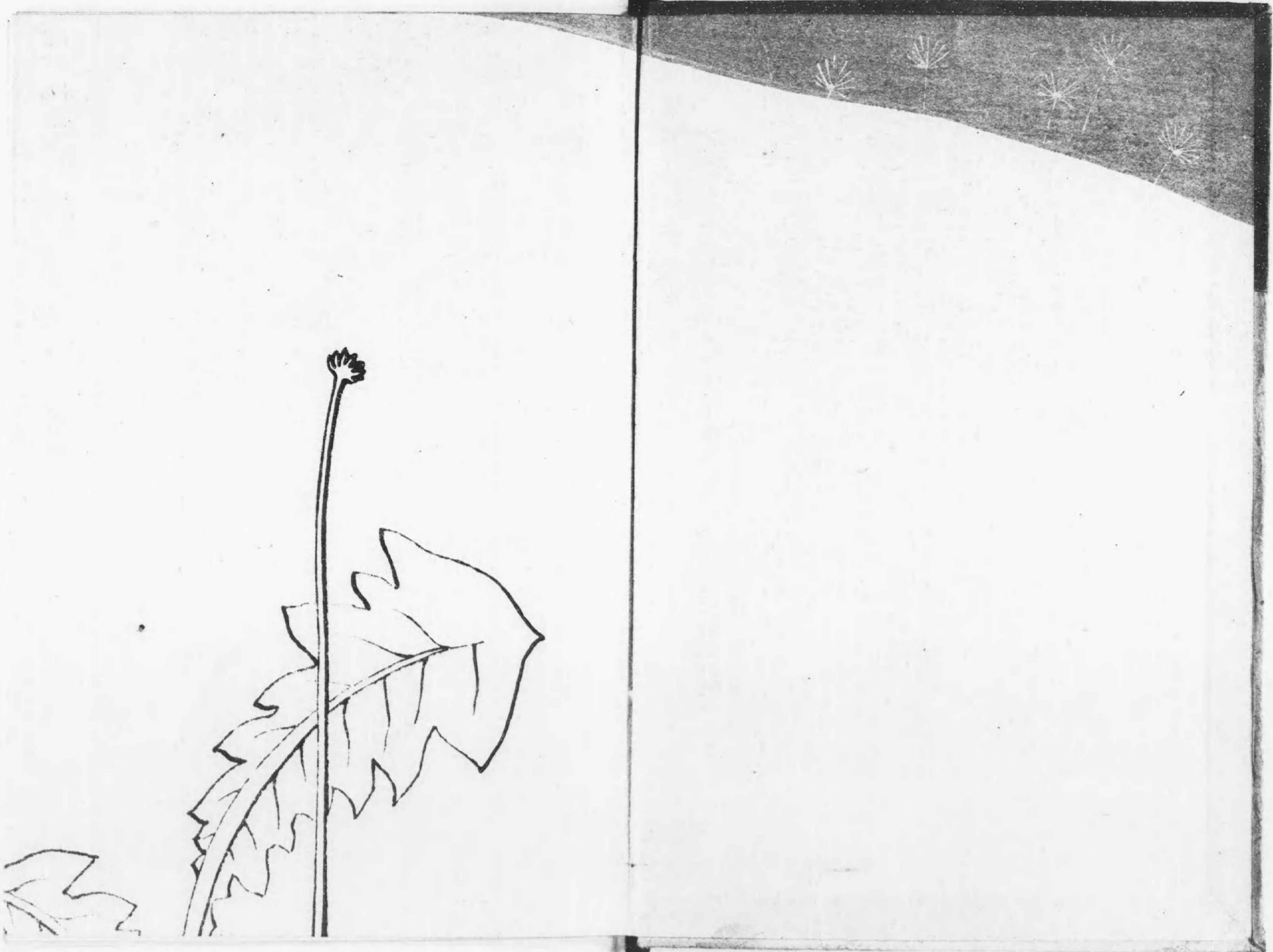


始





特110
551



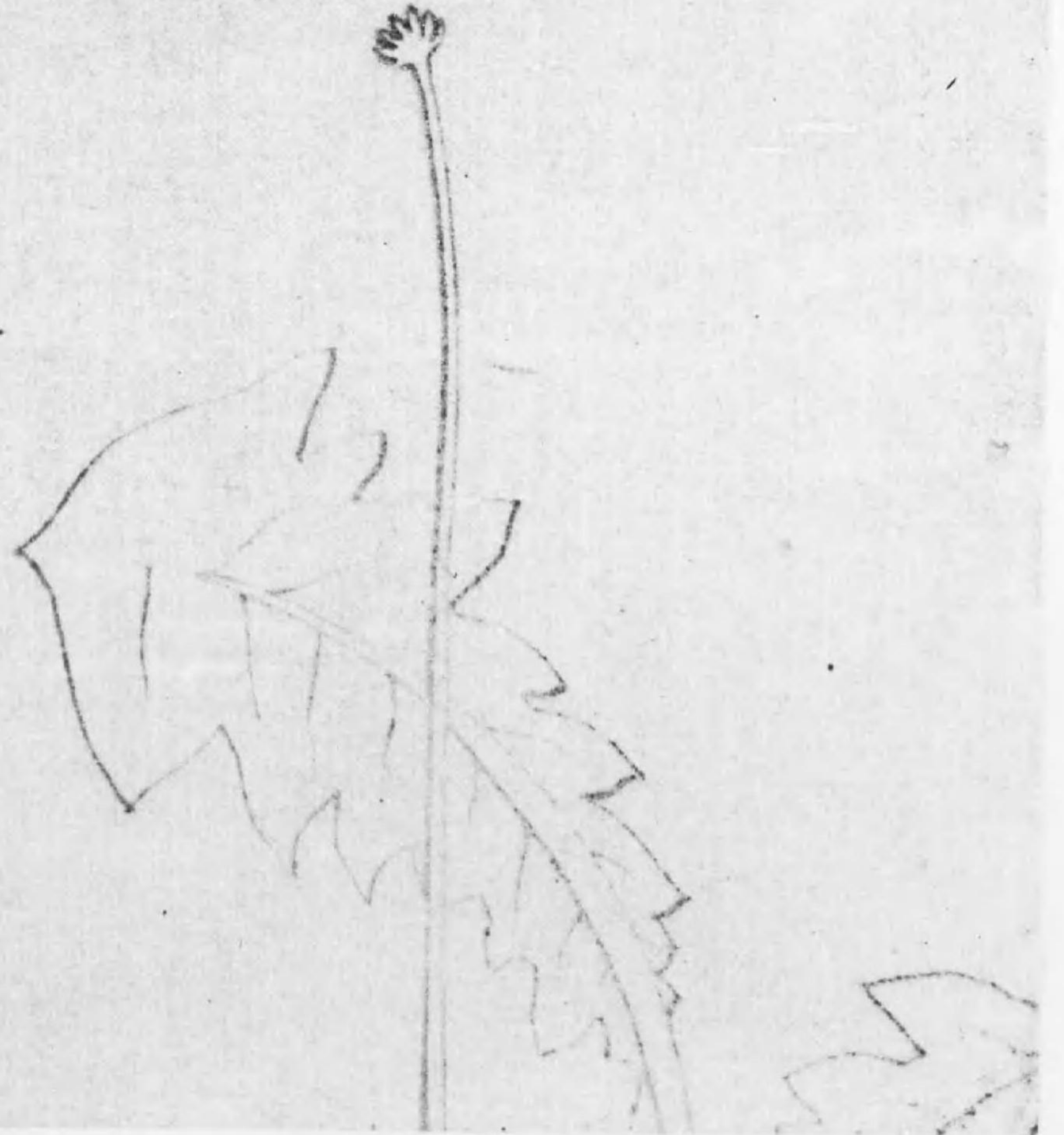
民謠
麥

平井晚村著

玄
文
社
版

笛

大正
8.9.26
内交



巻頭小言

『静かな二百十日ですこと。これではお米もさがりませうよ』
忙しい商家の暖簾を脱けて、自分の病氣を見舞ひに來た妹は、乳呑兒を膝に笑はせながら、小窓のもとに寛いで這麼話をした。

『アラ……虫が……』

女氣の腹も立てずに、そつと追ひやる團扇のさきを、可愛らしい秋の虫が、青い髻を動かしながら、びよいくと窓の外へ出た。

子供たちは、明日から學校が始まるので、頭を刈りに行くやら、硯を洗ふやら、支關の格子を出つ入りつして、朝から氣を揉んで居る。

如山君が、籾から土産を持つて來て呉れた利根の鮎も、青い芒の苞をほぐすと、尺近く美事に肥えて居た。

何となく心の軽い、秋らしい思ひに浸つて、久し振で机の前に座つて見た。

氷枕も一昨日から柱の釘にかけ干してある。

氣の早い女中は、小障子を井筒に運んで、ざぶ／＼と洗ひはじめた。

この頃は蝸の聲も稀になつた。

夕顔の花も宵々に小さくなつた。

山の多い上州路の秋は、踊りのあとの天河と共に、やがて深くなりまさるのであらう。

伯母さんと一緒に、お朔日といふので隣りの神社へ詣つた。お賽錢をあげて、

鑼口を鳴らして、ぼん／＼と拍手を打つて、神に願ひの數々は何であつたか!

二十日振りに土を踏んだ桐の下駄が、思ひなしか重かつた。

女中の手に、茶器や座布團が片づけられると、自分の周圍にはもう誰も居なかつた。

ぼつ／＼と取残された自分の膝は、机に向つて正しく組まれた。——餘義なき沈黙——本を読むか、原稿を書くか、頼杖ついて物思ひに耽るか——之れより外に勤めのない自分は、打捨て、置いた手紙の區分をしたり、約束の原稿を書く順序を定めたりしてゐるうちに、遂つり込まれていら／＼と焦れはじめた。——いふ／＼な理由もあるが、要するに、粥を啜つて寝て暮した病中の責務觀念に、追ひかけるやうに襲はれたからであつた。

『こんな事では仕方がない。……………いつと確かりしたものを書きたい』

枕に縋つて臥しながらも、いく度恚うした嘆聲を洩らしたであらう。——母の亡い三人の子を育て、ゆく味氣ない責任のほかに——自己の存立を紀念すべき何

ものかを遺さねばならない。——一篇の詩、十七字の句、たとへ形は小さくとも、よし又、世上から顧みられずとも、眞に、自己の藝術的良心を満足せしめ得るだけの労作を擱めば足りるのである。

自己を捨てたくない。——飽迄も眞面目に自由に、隨所隨時に偽はらざる自己の感想を唄つて行きたい。

けれども、數ある舊稿を顧みて、常に失意の念を深うする自分は、この『夢笛』一卷を編むにつけても、一再ならず取捨に惑ふたのであつたが、結局、作意の比較的よく現はれたと信ずる稿のみを採る事としたのである。

『夢笛』は自分の第二詩集である。

大正四年に國民書院から刊行した詩集『野葡萄』以後の作から撰抜したもので、自分の一家が、東京から逗子へ、逗子から郷里へ、居をうつした慌だしい生活の

變化や、豫期せざる喜憂の表裏に因縁を有つた作が多い。

自分にとつては、思ひ出の多い實生活の記録である。

値める芙蓉に二百十日かな

これは一昨年の二百十日の朝、相州逗子の閑居で作つた句である。その前年までは永らく東京に住んで居た。三人の子供も皆東京で産湯を使ったのである。——昨年卯月、亡妻の遺骨と、三人の子供を左右にして上州へ戻つてから、ゆくりなくも、重ねて二百十日を故郷に迎へた譯である。

來年の二百十日には、この文机が果して何處に据えられる事やら。

自分は、ひたすらに『夢笛』の上梓を待つばかりである。

夢 笛……………六

産衣縫ふ嫁女の、針の手を急ぐのと同じ心で——。
慎ましい善男善女が、御本山詣りの首途の日を、指折り数えて待つやうに——。

郷里 前橋にて

大正七の二百十日に 著者

目次

都はなれて——(大正五、六年作)

- ◇相摸の海……………一
- ◇貝の葉……………四
- ◇海の鳴る頃……………七
- ◇お手玉……………九
- ◇七草まで……………一二
- ◇春待つ宵……………一五
- ◇淋しかる……………一八
- ◇野に住めば……………二〇
- 目次……………一

目次……………二

◇梅の散るまで……………二二

◇顧みがちに……………二五

◇梨賣り娘……………二七

子守唄——(大正七年作)

◇夢のふる里……………三一

◇片袖……………三四

◇母にかほりて……………三七

◇淡雪……………四〇

◇淋しき春……………四三

◇國へ歸れば……………四六

◇山の古栗……………四九

◇正子の籬……………五二

◇ことしの花……………五五

◇籠戀しき……………五八

◇夢に乳房が……………六一

◇蚊遣焚きつゝ……………六四

◇蓮の飯……………六七

◇燈籠……………七〇

麥 笛——(大正四、五、六年作)

◇螢と共に……………七三

目次……………三

目次……………四

◇與太郎……………七五

◇卯月……………七七

◇婿とる宵……………七九

◇夏痩せ……………八一

◇權兵衛……………八四

◇田圃の家……………八六

◇わしの思ひは……………八八

◇そらごけ帯……………九〇

◇山の小猿……………九二

◇朧夜……………九四

◇花菜月夜……………九六

目次……………五

◇ひとりもの……………九八

◇鐘撞きやる……………一〇〇

◇蟬とる子……………一〇二

◇彼岸花……………一〇四

◇鹿の子の帯……………一〇六

◇土いぢり……………一〇八

◇暖簾のかけ……………一一一

◇親のない子……………一一三

◇隣の小女郎……………一一六

◇櫻ん坊……………一二七

◇ひな娘……………一二九

目

次

六

◇雁の來るのに……………一二一

◇燕と雁……………一二五

◇種屋の娘……………一二七

◇二日灸……………一二九

◇茶屋の晝……………一三一

山

繭

集

(大正四、五、六年作)

◇落梅花……………一三三

◇湯女の黒髪……………一三六

◇短か夜……………一三九

◇父の留守……………一四一

◇故郷の妹へ……………一四三

◇寢ざめ……………一四四

◇峽の家より……………一四七

◇雪ふる村……………一四九

◇吾妻山……………一五二

◇乳母を思ひて……………一五五

◇里の子……………一五八

◇松の内……………一六三

◇女猿曳……………一六六

◇鳥追ひ……………一六九

◇雛……………一七二

目

次

七

目次……………八

◇芋の葉……………一七五

◇霜の夜……………一七七

◇山家に住めば……………一七九

◇夕月……………一八四

◇新世帯……………一八六

◇他國の空……………一八八

◇露の宿……………一九〇

◇椎の實……………一九二

◇春隣り……………一九四

都はなれて

(大正五、六年作)

相模の海

暫らく病を養はんとて、俄かに都の寓を閉ぢて逗子に移る。沁々と啼き暮るゝ蝸の管を灯して、藥煮る新居の軒に海吹く風は廣けれど、小さき枕を並べたる幼なき兒等の夢をおもへば、松^{まつ}穂^{かき}の青きに明くる渚の宿の本意なくも佗しう思はれつ(大正、五、八月)

山に育ちし父母^{ちちうめ}の

袖にかくれて見も知らぬ

相模の海へ來ぬるさへ

宵寢の夢は淋しきに

都はなれて……………二

都戀しとたま〜くに

思ひ出でゝはさしぐめど

病む父ゆえにあきらめて

機嫌よき兒のいとしらし

馴染まぬ垣の連つれもなく

幼なきものは庭草に

かくるゝ蟹を捕らんとて

母に手網てあみもねだりしか

雷を怖がる仲の兒に

晴れたる雨よ、空高く

蜻蛉の翅の光るさへ

海の眞晝は静かなり

相摸の海……………三

都はなれて………四

貝の葉

都はなれて、山の端の

月の相模路はるくと

來馴れて住めど潮の音の

明け行く夢は侘しうて

そゞろ歩きの砂濱に

秋を別れてちりぐの

人もあらねば松毬まつかさに

とざせる門の静かなる

海吹く風にひろくと

帆を捲く見れば浦人の

まだきに歸る鉢巻の

白さに冴ゆれ、波の色

都はなれて、貝の葉を

庭に敷くなる垣のうち

心易さよ、戸も立てず

貝の葉………五

都はなれて………六

晨の海を見て坐るかな

海の鳴るころ

山にかくれる汽車をみて
都戀しと泣く子ゆえ
宵焚く風呂の暗がり
母の涙はあるものを

十月、海の鳴る聞いて
夢も小さく寝ぬる子に
風邪ひかすなの氣づかひも

海の鳴るころ………七

机の前に座る父われ

都はなれて……………八

お 手 玉

幾ら澤山子供はあつても、可愛さに變りはない筈であるが、母親は何かにつけて女の子を甘くする風が見える。ふたりの兄から仲間外れにされるのが不愜だからださうな。赤い帯、花の小袖、無理をしても着飾らせようとする心は、幼ない正子が、雛壇の雪洞の灯を見て嬉しがると一つである。罪のない振舞だ(大正六、一月)

正子まさこは幾つ、初夢も

ことし六つの下げ髪に

連つれは無けれど庭のうち

ころく遊ぶお正月

お 手 玉……………九

都はなれて……………一〇

娘なりやこそ、幼なうて
鏡の前におとなしう
白粉つけて紅さして
襟を重ねた春小袖

田圃の霜が消えたなら
赤い草履に足袋はいて
道草くはずいそくと
行くと云ふなる幼稚園

男のなかの女の子
母に甘えて叱られて
お手玉持つて一い二う三み
いま泣いた鴉がもう笑つた

お 手 玉……………一一

都はなれて……………一二

七草まで

稻刈り、麥蒔き。休みなく働いて居た人々も、流石にお正月は悠
たりとして家に籠つて居る。格別年始に歩くでもなければ神詣り
もせぬ。そのなかに雑つた我が家の春も亦呑氣である。三丁の路
の右左に門松もチラリホラリ。渚の砂を踏んで拜がむ初日のかげ
に、親子五人が恙なく春を迎へ得る幸福を思ふた

田圃の風に紙鳶あげて

争かひ絶えぬ兄弟の

足袋も帽子も新らしき

村のなかなる一軒家



枝に残りて色づける
蜜柑の珠たまを轉がして
道中おそき双六の
宵の泊りも親子づれ

萬歳も來ず、鳥追の
唄も聞かれぬ里ながら
磯の小松の葉のかげに
海の初日も拜みしか

都はなれて……………一四

隣に遠き年頭の

こゝろ暇なる田に畑に

鋤をやすめの人も見ぬ

七草までの春は長閑けし

春待つ宵

子供の爲なら、裸木の霜も物かは。と力んで居る妻は、見知らぬ國の春に逢ふ苦も知らぬげに、更け沈む灯のもとに裁ち板を据ゑて、帯よ羽織と幼なきものに慈悲の針を急いで居る。自分も昔、慙うした苦勞をかけて母の手に身丈が伸びたのだと考へると、『子を持つて知る親の恩』が沁々と味ははれた

その名ばかりの松立て、

宵寐の子等が枕邊に

春待つ帯もくけながら

老けゆく妻の髪かたち

春待つ宵……………一五

戸に来る霜の音も絶えて
静けきまゝの野の家に
昔おもへば羽子板を
抱いて寝し夜もありけむを
水仕のわざの冷たさも
子ゆるるに、遠きふる郷の
暖簾の奥を立ち出で、
ことしも旅の年忘れ

餅も搗かせて裏白の
葉かげ静まる夜の路を
髪結ひも来ぬ田舎なれど
心たのしく住む身かな

都はなれて……………一八

淋しかる

|| 幼き子等に ||

みづ怖こはさに釣もせず

父のうしろに匿れては

田圃の橋の往き戻り

連つれもない子は淋しかる

たま〜母に叱られて

都こひしと泣いたとて

都に家は無いものを

見知らぬ里は淋しかる

淋しかる……………一九

野に住めば

野に住めば拙なき夢の

ふる里を遠く離れて

ことし又、旅の小袖に

散る花の哀れをおもふ

庭草の寛ろぐさまに

端居はしむして寝ざめいとしむ

静けさよ、ひとり居馴れて

つれづれに牛乳ちあたゝむる

麥の葉に日和つゞけば

種蒔きの在所の人に

春風のそよろくと

唄誘ふ空も晴れたり

都はなれて……………二二

梅の散るまで

冬暖かい海の日晴にそゞろ歩きしての戻るさ、茶の樹がくれの百姓家の障子の蔭に化粧する少女を見た。戀に活き、涙に瘦せるその頃の心床しは恚うもあらうかと、机の閑にこの一篇を得た。

浅きながらの春の日に

髪を洗へば鶯の

さゝ啼き寒さ立て鏡

肌にはほのめく野の風の



軽さに育つ草の穂を
せめては櫛に添へましを

垣に匿れて機織りの
ひまなき戀のなぐさめに
俯つくる眉刷毛も

夕べとなれば戸に立ちて
待つらし、月の山坂を
越えて來るてふ藁草履

都はなれて……………二四

人には告げじ——嬉しさは
夢の名残の片袖に
梅の散るまで、櫻咲くまで

顧みがちに

|| 大正五の秋、上州へ歸る母を送りて ||

田圃の畦にたゞずみて
見送る子ゆゑ、母はまた
藁屑ふみて、たどくと
顧みがちに去ぬものを

人をたのみて停車場へ
貝や魚や、いろくの

顧みがちに……………二五

都はなれて……………二六

土産の數々送るにも

別れの朝は淋しうて

消なまく霜の残るさへ

麥のこぼれ芽寒かるに

赤城のふもと雪風の

遠くへ歸る、母ぞ戀しき

梨 っ り 娘

『梨を買はしやれ、ころ〜と

味よい梨を子供衆に』

恥かしさうに籠脊負つて

厨をのぞく束ね髪

涼しう笑める片ゑくぼ

いとしの郎さなに突つかれて

うしろ向いたる宵月の

梨 っ り 娘……………二七

都はなれて……………二八

水車の蔭の戀もある

肩におもたない小袖より

いつそ身軽な裾からげ

氣まゝに萱の軒ふいて

竈に柴も折らうもの

茄子の紫、齒に染めて

南瓜の嫁になる身にも

せめて蒔繪の櫛、手箱

それが欲しさに梨も賣るやら

梨うり娘……………二九

子
守
唄

(大正七年作)

夢のふる里

幾とせ振にて故郷に春を迎ふる身も、亡き妻の喪にこもりては門
松の青きも立てず、裏白の葉の徒らに思出の多き事かな。雪白き
赤城の山を窓に仰げば、今昔の感胸を刺す心地す。

昔ちもへば、春霞

立つとし聞ける山々の

初日のかげに戻り来て

軒端に風の冷たさよ

丸鬘結うて紅さして

改まりたる女房の

年賀の沙汰もなき身ゆる

せめては去年の懐かしき

子等が着初めのさゝめきも

男世帯は味氣なや

下駄に、帽子に、簪に

心疲るゝ松の内

宵寐の癖に灯して

小さき枕をさせつゝも

机の上の物思ひ

父と呼べるゝ我は悲しき

子守唄……………三四

片袖

妻亡き後の初めての正月とて、何呉となく惑はしき事のみなり。
机の閑に簞笥を覗けば、十年一昔、嫁入りの行李に秘めたる京染
の片袖のみぞ残れる

娘心に恥かしう

縫ひけむものを片袖の

つきぬ名残に褪せもせで

わが眼にうつる染模様

水色澄める縮緬に

桔梗の花のしほらしさ

日頃淋しき心根に

好みて染めし遺品かたみとや

宿世すぐせ短かき戀ゆるの

長さ怨みを語るとて

ふところ鏡いつまでか

拭へど曇る涙かな

片袖……………三五

せめては在りし俤を

胸に疊みて片袖に

秘めたる夢のふる事を

思ひ侘びつゝ我は朽ちなん

母にかはりて

こぞ 去年までは正子にも母は在りき。今年七歳の春のはじめに、父の手づから帯めて遺るがいとしや。幼なくて母の亡き子の下げ髪に、初日のかげの奈何ばかり侘しかるべき。——墓の下なる亡き妻の斯くや思ひてあらんなぞ唄びつゝ

はぐれて逢はぬ道もせに

ほぐりの鈴を鳴らしつゝ

戻らぬ母をいつまでか

たづねて夢に迷ふとか

思ひ残して父の手に

預けはしつれ、針持たぬ

男心に肩揚も

去年こその儘なる年忘れ

日毎の髪を取上げて

人の情に花櫛の

紅きはさせど明暮に

心置かるゝ鏡立



春の蒼に追羽根の

長き短かき袖たもと

母のなき子とかまはれて

涙こぼすな、哀れ正子よ

子 守 唄……………四〇

淡 雪

去年湘南逗子にて迎えたる春の元日は、淡雪の降るがまゝに炬燵して、妻も子供も睦まじう家居したりき。ゆくりなくも双六の賽振る母にはぐれて、幼なき旅人はことしの春の路に迷ひぬ

春の淡雪ちらくくと

降るが嬉しく戸に立ちて

雀の毘に興じたる

田圃の家を立出で、

はるく、來ぬる故郷の

山の多きに驚きし

幼なき子等に恙なき

年は立てども、淡雪の

消ゆるに早き思ひして

手にもたまらぬ本意なさを

人は知らじな、身ひとりの

世にそむきたる我が心

淡 雪……………四一

春の淡雪、ちら〜と

今年もふらば戸に立ちて

小さき傘をさしかけて

わりなく父は子等と遊ばむ

淋しき春

同棲十一年。三人の子實を設けて末遠き老後を楽しみ居たる妻は
去年暮春櫻ん坊の赤らむも待たで白玉樓中に急ぎぬ。——ことし
の春の淋しさ、我にも、子等にも例へんかたなし

行く年の名残の空に

百八の鐘も消え入る

静けさを寝惜む子等を

叱るべき母もあらねば

兄妹は佗しう起きて

若水に顔も洗ふや

書初の机ならべて

おとなしう墨もすりけむ

いとほしや、末の娘の

只ひとり手毬つくとして

忘れたる唄の一節

問はれても——父は知らぬに

初春の軒の門松

明暮を人も訪ひ來ず

双六の長き旅路も

遣瀬なや——母の在さねば

國へ歸れば

お江戸離れて三十里

本意ない旅であり乍ら

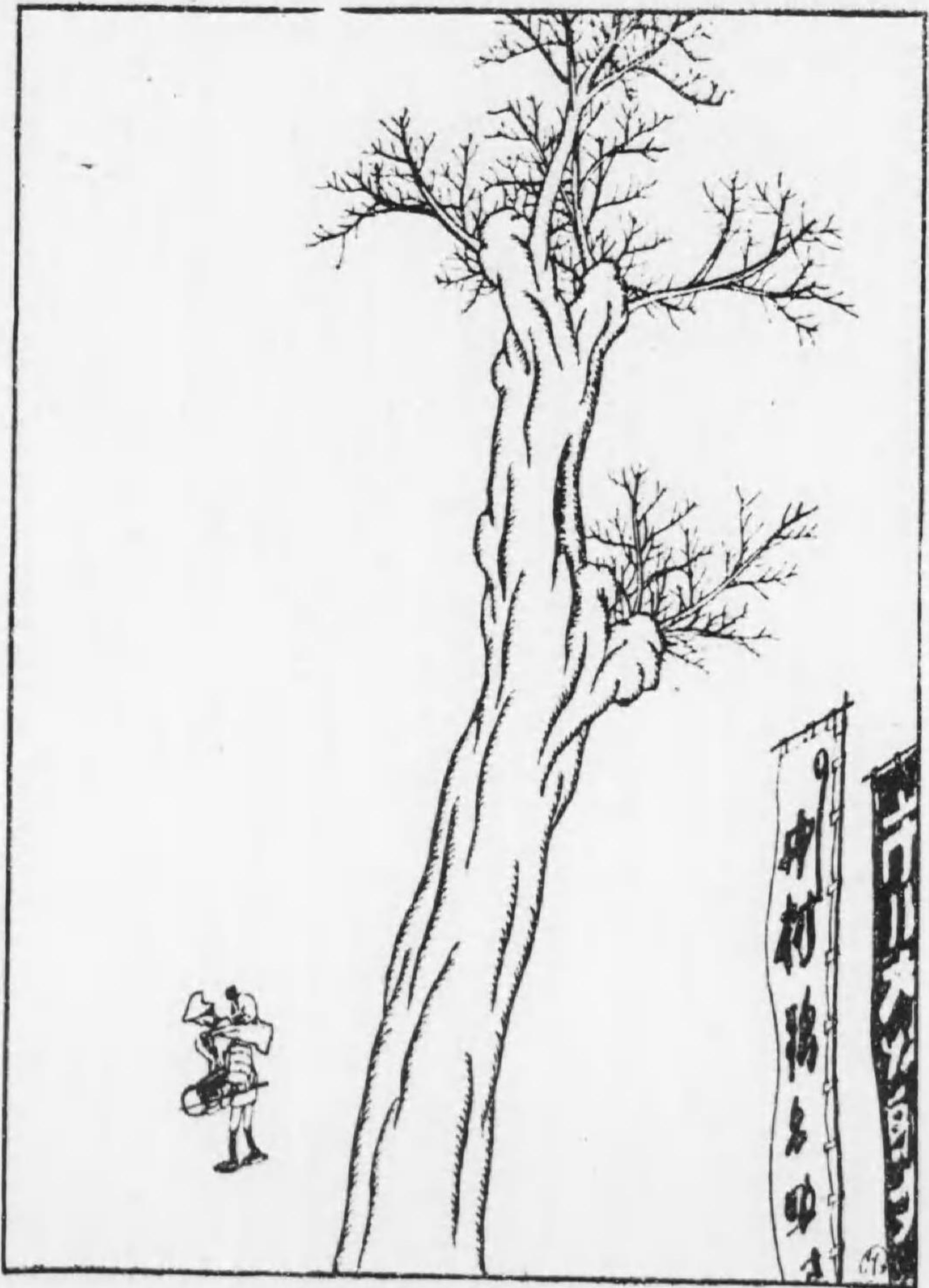
故郷へ歸れば懐かしい

赤城山から日が暮れる

霜月、師走、お正月

曆めくれば門松の

蔭から覗く猿曳も



昔ながらの町のさま

たま／＼聲をかけられて

若しやと思ふ幼な顔

喧嘩仲間のあ互ひに

子持ち、金持ち、世が變る

鳶とろろと日が晴れりや

在所の駒に鈴つけて

花嫁乗せて鼻唄の

婿が手綱を曳いて来る

初荷、初市、初芝居

七日の春の骨やすめ

故郷へ歸れば懐かしい

利根の瀕音を聞いて寐る

山の古巢

疎くなりゆく人々の訪づれも待たず、明暮の味氣ない寂しさのなかに、母のない子を育て、ゆかればならぬ病軀は、身も心も糸のやうな心細さを思はぬ日はない。さりとして、活きねばならぬ慰安なき努力のために、屢々忙しく上京する事があるが、子供ばかりを残して置く旅の往來に、打寛いで詩を想ふ餘裕もない

妻に死なれてしをくと

山の古巢へ戻るさへ

幼ない子等にせがまれて

お伽噺もせにやならぬ

麓の雪に咲く梅の

うつろひ易き人ごころ

櫻、躑躅——の明暮に

取り残された身ぢやほどに

父は子ゆゑに、日もすながら

夜すがら坐る文机に

肩が凝るとてペン措いて

味氣ないぞえ、物思ひ

たま／＼汽車に乗るとても

隣へたのむ留守のこと

怪我せぬように、おとなしう

母のない子が待つゆゑに

燕のやうに忙しない

その日歸りの旅小袖

よしや綻ろび切れたとて

縫うて呉れよう妻もない

正子の雛

母の亡い娘のいとしさに
父の手づから雛立て、
桃も剪るやら、雪洞の
灯かげ侘しき殿づくり
隣の連を呼び合ひて
屏風のかげのさゞめ言
わづかに酔へる白酒の

うすき縁と知りもせで

更けて悲しき小枕の
あやなき夢に逢ひに来る
冥途の母と添寝して
朝の別れは辛かるに

浅き臍の去年まで
やさしい母が居たものを
ことしの春の雛祭

子 守

唄

五十四

正子ひとりに、父は淋しき

ことしの花

去年の春は、一家打揃うて逗子の閑居に畑の桃の花を見た。田舎に馴染れた子供等は、元氣よく田の畦を傳つて幼稚園へ通うて居た。今年も花は咲いたけれど、母と別れた幼ない子供等は打揃うて唱歌を唄ふやうな事もない

田圃のなかに垣結うて

ひろく住める菜の花に

卯月の蝶のもつれては

寝ざめ静けき空曇り

ことしの花……………五十五

机の前に寛ろぎて
筆持のひまの土いちり
わづかに浅き百合の芽に
欣び合へる春の日は

物縫ふ妻と端居^{はしひ}して
心明るく待つ軒へ
唱歌唄うて戻る子の
軽き裕や、海の風

かくてありしも——夢にのみ
おもかげ残る去年^{こぞ}の花
ことしの花へ降る雨に
佗しく濡るゝ父子鳥

麓戀しき

心あへる友を誘ひ、飄然と伊香保に登り、千明仁泉亭に泊る。——
里とちがひて山冷に早く鎖して、湯上りの心静かに枕はすれど、
父の居ぬ夜を淋しう寝る三人の子等を思ひては我にもあらで臉に
涙の溢れたりし。——母ありせばと思ふ子等にも、妻ありせばと
思ふ父にも、この末の五年十年、否、生命の限りこの悲しみの消
ゆる時無けむ

蕾ながらに春惜しむ

赤城つゝじの花も見で

旅に出でたる假初の

心惑ひも誰ゆるに

旅に出るとて、戻るとて

羽織の紐の結ぼれを

解くに由なき佗しさに

思ひ瘦せたる我ひとり

秀づる麥の夕風に

吹かれて登る山の湯の

軽き疲れに寛ろげば

欄干ひくき里の月

父の居ぬ夜はひそくと
小さき枕に寝もやらぬ
母亡き子等を思ひては
父も寝やらで——麓戀しき

夢に乳房が

正子もこの頃土地馴れたから、幼稚園へ通はせる事とした。朝の
ほごは近所のお友達と連立つて出かけるが、女中が迎ひにゆくのを
忘れた生憎の折、俄か雨に降られて軒傳ひに濡れて戻つた事もある。
男の子は未だしも、母のない女の童には、兎角に涙を噎られるやうな、
淋しい顔を見せられる場合が多い

小さき鏡に髪結うて
リボンをかけておとなしく
朝寝の父の枕もと
挨拶するがいぢらしい

近所の子等に誘はれて
赤い洋傘さしかけて
お辨當さげていそくと
通ひ馴れたる幼稚園

母の迎へもない身には
戻りの雨の軒傳ひ
濡れた草履の重たさを
犬に吠えられ、泣きもした

袖も、袂も、黒髪も
日脚も伸びたうたゝ寝に
そろりとかけたほろ蚊帳の
夢に乳房が戀しかる

蚊遣焚きつゝ

亡妻は毎年夏痩せの癖があつた。返子に居た頃も『餘り痩せてひますから』と海水服を着る事を羞かしがる程であつた。三百坪の前栽に草花の種をおろして『この花が咲いたら、軒提灯をつるしませう』と楽しんで居たのに、伸びゆく莖の青きを見ずに死んで了つた。可愛想な事をした。——男手に三人の子供を寢かせて、只ひとり更けゆく月に端居して居ると、女々しいやうだが、今昔の感が胸一ぱいになつて来る

夕涼の柱のかげに

夏痩せてあるべき妻の

くろ髪も、白き頸も

今は亡き夢となりけり

湯あがりの寛ろぐ膝に

抱き寄せて子等を愛づるも

連れ立ちて夜見世に行かむ

母も無し——佗しう寝ねむ

短か夜の蚊帳の釣手に

残りたる紐の赤きに

在りし世の母や思はむ

子守唄……

うつゝなきち小さき枕よ

……六六

ほのくくと蚊遣焚きつゝ

端居して月を仰げば

そゞろにも涙ぐまれて

われひとり、昔なつかし

蓮の飯

苧がら殻買ふとて戸に立てば

明けて間まもなき蝸かの

泣くく通る人の手に

湿りがちなはとひげな佛花

早や立つ秋の盂蘭盆に

幼なき子等はひそくと

茄子のお馬を造こしらへて

蓮の飯………六七

亡母を迎へむ下ごころ

經讀みに來る小坊主と

膳を並べて蓮の飯

味なき箸も戴いて

褒められたさに畏まる

やがて暮れゆく燈籠に

睡たがる子よ、いとせめて

今宵は夢に夜もすがら



いとしま^は母の乳を探りね

蓮の飯……………六九

子守唄……………七〇

燈籠

佗しさよ、縁の端居はしりに
秋立ちて思ひ瘦せつゝ
糸芒暮れゆくなべに
燈籠を高く釣らまし

仰ぎ見る空の彼方かなたの
夕風に夢は通へど
立かへる俤もなき

母ゆえに、子等はいとしま

燈籠……………七一

麥

笛

(大正四、五、六年作)

螢と共に

お露は美しき村の小女、芋の葉の闇の契りを假初に打忘れたる若衆を慕ひて、夕の化粧宴れ行く戀を佯びつゝ迷ひ出でたりき

わりなき夢の仄めきを
草に包みて果つる身の
螢は悲し、戀ゆるゑに
迷ひ出で來し裏田圃

野末に月の上る夜は

夢

笛

七四

人にかくれて夏瘦の
帯もきりりと揺りあけで
辻の夜風に吹かれたに

情知らずか、忘れてか
露のみ更くる短か夜の
踊の唄をよそにして
螢とともに往き戻り

與 太 郎

母は隣村にありとし聞けど、名も知らず佛も見ず、與太郎は寺の
和尚に拾はれし哀なる子なりき

麥の埃りもしづくと
風にまぎるゝ夕明り
一つの橋に堺して
隣れる村は見えながら

暗きを辿る野の道に

與

太

郎

七五

麥

笛

そよ／＼月は照るとても

夜桑の畑に藁敷いて

棄てられた身は埒もない

親のない子と笑はれて

使ひ歩きの寺小僧

暮れて戻れど飯またいて

戸に待つ母の顔も知らねば



卯 月

こゝら卯月の小百姓、
畑にぞくく鋤入れて
種蒔くことの忙しさも
土筆つくしの丈たけに日が伸びた

宵寐朝起苦も知らぬ

小唄まじりの菜の花に

風呂も焚くやら、飯まくうて

卯

月

夢

笛

七八

脊戸の逢瀬は睡たかろ

婿とる宵

畑の菊の花摘んで

酔に揉みほぐす手料理も

垣にかくれて婿とりの

人待つ宵のときめきに

風も氣になる、野の萩に

若しや提灯消えたら

山の狐のいたづらに

婿

とる

宵

七九

夢

笛

いとしの婿さまを盗まれう

八〇

ふところ鏡、とつ措いつ

髪に重たい櫛さして

そつと出てみる裏木戸の

月に寒かる綿帽子

夏 瘦 せ

人に取りられた肩揚も

恥かしさうな鬼灯子は

口紅さして鬢結うて

戀も涙も知りそめた

襷のひまの針坊主

嬰やい兒の小袖を縫はうとて

うしろ向いたる夏瘦せの

夏 瘦

八一

麥

笛

八二

帯の模様の水葵

盥にあまる行水に

機嫌よき子を眠らせて

風も夕べの青すだれ

廣くもあらぬ家のうち

行燈あんどとぼして蚊帳釣つて

ねん／＼ころりと添乳して

うつら／＼と待つ宵の

月に枕も涼しげな

夏

瘦

せ

八三

夢 笛……………八四

權 兵 衛

霜の名残の麥ふみを

おどけ鴉に笑はれて

やすめば野良の粉煙草

梅に畑の日が落ちる

餘寒の山に戸をしめて

湯漬喰ふさへ暗がりの

睡むたぐの藁仕事

人に飼はれる身は辛い

權 兵 衛……………八五

夢

笛

八六

田圃の家

春風廣い野の家の

そよ／＼麥の明るさに

髪も結ふたり絲針の

宵を待つ身に日の永い

蒔繪の櫛と取替へた

十羽の雛は惜しけれど

郎さなに逢ふ夜の黒髪に

褒められたさの戀もある

田圃の家

八七



わしの思ひは

小室街道の穂麥の葉でも
唇くちにあてれば鳴るものを

せめて一夜の襷のひまに
うれし情もあらうかと

ついで、泣くまい辛棒したが
切れて戻らぬ風の糸

月の照る夜は板戸の奥の
ひとつ枕に寝てさめて

わしの思ひは浅間の煙
變りやないそえ、ほそくと

そら解け帯

風呂も化粧もそこくくに
飯もたべずにいそくと
月に恥かし袖たもと
誰に曳かれう下こゝろ

辻の夜風に落合ふて
踊の庭はうつゝない
そらどけ帯に罪させて



人にかくれた桑畑

そら解け帯……………九一

夢

笛

九二

山の小猿

親に逸れて、ちよろくと

木樵の小舎を覗くとて

拐はかされて人鬼の

背にはるくと旅の空

赤いべ、着た袖口に

涙も凍る、豆太鼓

囃せば犬に吠えられて

山のふる里戀しかる

山の小猿

九三

夢

笛

九四

朧

夜

朧夜草になよくと

日の暮れかゝる裏田圃

たまさか戻る鈴の音に

もしやくと出てみたが

馬追ひ唄の節廻し

上手を人に褒められて

郎さまはよけれど、繫がれて
駒に櫻が散りかゝる

あすの稼業つとめもあるものを
きりゝやしやんと帯しめて

待つ身に紅い衣買うて
戻らさまう郎の顔が見たさに

■

夜

九五

夢

笛

九六

花 菜 月 夜

山家在所の菜の花の

三里の路を嫁とりに

駕籠を嫌うて鞍置いて

土産の花を乗せかけて

染分手綱はるくくと

提灯とぼす杜のかけ

扱も殿ぶり、嫁御寮
うづらくと朧夜の

月に照られて恥かしい

送りの衆の唄聞けば

『梅に別れて、櫻に逢うて
春の色鳥嬉しかろ』

花 菜 月 夜

九七

ひとりもの

隣りの嫁に聲かけて

戻る垣根の夕明り

戸口の空の葉がくれに

寝に来る鳥も静まれば

草鞋解くく二合半こながらに

蚊遣くすべて丸裸

とろりと酔ふた盃の

底に涼しい月が照る

夜風は毒なうたゝ寝に

風邪を引からが引くまいが

戀も無ければ寄添ふて

夢をいたはる袖もない

夢

笛

100

鐘撞きやる

寺の坊さん鐘撞きやる

泣いて別れた山裾の

人に逢はれぬ淋しさに

心細さに鐘撞きやる

日暮忙しい針仕事

思ひ出すやら、出さぬやら

お前いつまで鐘撞きやる

雪の白無垢、阿彌陀佛

死んでお寺へ来る日まで

鐘撞きやる

101

夢

笛

蟬とる子

つくづく法師、つくづくと

身につまされて泣く母の

心知らずに子はひとり

連もなければ蟬を捕る

父も見知らず、絲曳きの

母の情なまけに生なまひ立てば

やがて酒屋の樽拾ひ

1011

雪に草鞋もはくである

蟬とる子

1011

夢

笛

一〇四

彼岸花

寺へあづけて、たまくくに
團子まるめて逢ひに行く
母は子ゆゑに、いそぐと
遠い田圃の彼岸花

立寄る垣に手習ひの
草紙干したる菊の日に
里のお寺の庭を掃く

帚に露が重たかる

彼岸花

一〇五

鹿の子の帯

灸に鹿の子の帯解いて

柱のかげの物思ひ

艾まろめめる前髪の

寺の小姓に逢ひたさに

いづところへて、禮云うて

戻りの坂の繪日傘に

お山照る日も、曇る日も

夢のつゝじの花が咲く

土いぢり

この頃、日頃うとましい
 髯も剃らいで風邪ごころ
 結ばれがちの氣晴しに
 苗賣る笠を呼び入れて
 ほろりくと揉みほぐす
 土の濕りに陽は軽く
 からげた尻に朝風の

いよろと吹くが嬉しさに

糸爪は垣に、百合の芽の
 淺きを埋めて泥鉢を
 水に洗へば花桐の
 根かたに残る春の草

やがて葉となる、蔓となる
 鄙めく花に短か夜の
 寢ざめの庭をたのしみに

麥

笛

110

素足の儘の小半日

暖簾のかげ

少年の頃の思ひ出

蝙蝠来い、こつちへ来い

草鞋わらじやろと日も暮れて

戻る暖簾の影ひろく

酒樽積んだ家のうち

肥つた祖父は湯上りの

團扇かた手の夕涼み

暖簾のかげ……………111

二合の酒のお酌して
賢こい孫と褒められた

祖母にせがんで松虫の
音のよき籠も買うたれど
あたら短かい夢の間に
悲しい秋の風が吹く

親のない子

親はなくとも育つ子に
荒くは吹くな山の風
立寄る軒もないものを
使ひ歩きは佗しかる

他の春着の躰びとけ糸
見るにつけても薄綿の
わが身の袖に情なや

雨も涙も凍らうに

朝は暗いに尻からげ

両手にあまる樽拾ひ

犬が怖さの廻り道

戻り遅れて叱られて

昔おもへば獨樂廻し

紙鳶の遊びもしたものを

今は丁稚の藪入りも

親のない子は連もない

隣の小女郎

婿を取るとして隣の小女郎

帯も氣になる、小袖も、櫛も

花の簪、都の紅も

親の情で揃へてみたが

なせに揃はぬ齒ならび目鼻

眉の三日月、逢ふ夜の君に

もしや投げ梭、届かぬ糸の

切れはせぬかと物思ひ

櫻ん坊

花はちらく

散り果て、

おいてけ堀の櫻ん坊

羽織、葉袖のほころびを

青梅の伯母に叱られて

赤い顔して

泣くのやら

そらぢやなけれど

あけ暮に

目白鳥の伯父に憎まれて

梢の宿を突き出され

ほろりくと

泣きながら

母をたづねる迷子札

ひ な 娘

春蠶はるごしまふた野の家の

日暮をしのぶ裏田圃

昔の戀の細道に

ゆかし嬉しの唄もある

山の宵月、野の鴉

淋しいなかの樂みは

夜桑をくく切るところの

夢

笛

110

戀知りごろの鄙娘

山 旅 籠

梅に二月の山暮れて

可愛^{いと}しの客に軒風呂の

柴を折るやら、湯上りに

酒の仕度もして御座る

よしや行燈^{あんど}は暗くとも

木の葉布團は薄かるが

櫓の明りに夜もすがら

山 旅

籠

111

夢

笛……

一一三

酌もいとはぬ、ひな唄も

山の旅籠の蕙戸に

月がのぼれば旅人の

娘ありやこそ来て泊まる

三國峠のうしろ谷

雁の來るのに

父は鑛山へ金ほりに

母は籠へ糸とり

山家の小舎へ残されて

姉は機織るとんからり

十歳にも足らぬ弟の

落葉の籠が重たかる

雁の來るのにいつまでも

雁の來るのに……

一一三

夢

笛

一二四

戻らぬ親が怨めしい

燕 と 雁

春のおぼろ夜雁がねの
旅は道づれ、親子づれ
花が咲くのに何故かへる
うまれ故郷が戀しさに
海山越えて急ぐのか

いち度は雁に逢ひたさに
ことしも來たにつばくらめ

燕

と

雁

一二五

柳の宿へ泊つても

雁と燕は西ひがし

遠くはなれて泣き暮す

同じ翹を持ちながら

旅から旅へわたるにも

つばめの箭文雁がねの

首にかけたる玉章を

見せも見もせず

花が散る

種屋の娘

そこら近所の種屋の娘

程がよいとて、祭りの宵に

曳けば曳かるゝ振そで袂

野良に浮氣の種を蒔く

堇すみれ たんぽゝ、菜種ななしの花よ

何と咲くやら、思はせ振な

月が覗こが、蛙が啼こが

夢

笛

一二八

忍ぶ臍にや埒もない

二 日 灸

山焼き野焼きはるくと
霜に別れし陽炎の
草の淺さにちろくと
雉子の尾を見る春の日は

麓の家の二日灸
かこひ屏風の肌寒く
乳房おさへて十七の

二 日

灸

一二九

夢

笛

浮氣の蟲を焼き殺す

130

茶屋の晝

姉が居るとして、清水の

舞臺の奥のうら山の

淋しい家を思ひ出す

茶屋の二階の晝さがり

いけずの郎さやのざれ口に

盃事もほどにして

辛氣くさゝの耳痒ゆく

茶屋の晝……………131

夢 笛……………一三二
鐘が鳴るく、幾つ鳴る

山 繭 集

(大正四、五、六年作)

落 梅 花

わが知れる薄命の女子あり。幼なく父母に別れて見知らぬ國へ嫁ぎ、はしたなき郎に戀の昔を忘れて味氣なき日を送り居れりと。ことしの春も花にそわきて、啼き急ぐ雁のゆくゑに、小女でありし古郷の空や偲ばむ。哀れなる事におもひて、そゞろにもこの一篇を綴る

佗しさは鉄の鈴の

鳴るにさへ心おかれて

灯ひともしの庭のくらさに

落梅花そゞろなるかな

ふるさとに、遠き昔の
夢さぐる母のふところ
おもかげは隔たりぬれば
只悲し旅のあけくれ

いつまでか鏡に瘦せて
かくばかり嘆きてあらむ
はる／＼と海山越えて
燕さへ軒へ戻るに

せめていま小草のかげに
立よりて春を待つとも
わりなしや、帯も小袖も
匂ひなき戀のぬけがら

かへりみて郎も怨まじ
黒髪を枕に敷きて
落梅花、我も消なまく
思ひ出にひとり慰さむ

湯女の黒髪

湯女ゆなと呼ばれて赤襷

行燈あんどんを配る廊下にも

麓の家の戀しさに

物を思へる夏山の

峽かきの湯煙ほのくくと

都の客の髪かたち

かりそめに咲く山百合の



なよび姿の恥かしう

戀知りそめし眉刷毛の

夢を洗へる笥の水も

人は掬ひばで秋近く

枝にのこりし山の繭

風さやくと戸に白む

霧も冷たき温泉ゆの宿の

鏡の前に坐るとき

なびける髪もうとましや

瞳明るく欄干かざしに

帯揺りあげて立ち盡くす

淋しさ心、すい〜と

宵の蜻蛉はまぎれけり

いつまでかくて在り佗びむ

軒に短かき日の影を

軽き草履に踏みながら

月ひろき野へわれは降らむ

短 か 夜

おちこちに水鶏も暮れぬ

夜仕事の灯も消して

風ひろきこゝら片里

ひそやかに人は眠るか

柿の葉にうす照る月の

揺らぎくる窓の明りに

さら〜と蚊帳はなびきて

さりげなく枕を包む

短か夜は夢もおもはず

はやすでに朝の機織る

家となり、晴れゆく唄に

山遠き雲も見ろかな

父の留守

——以下四篇、湯河原温泉より——

父の留守、小さき枕に

宵寝して淋しうあらむ

片ほとり都大路に

板戸うつ風は吹くとも

夜泣きして母に叱れな

風とく起きて、唄とをうたひね

温おと和しう鞆をかけて
學まなび舎へ往きも戻りも
かりそめに友に誘はれ
道草や、犬に咬まれて
父の留守、母を泣かすな

故郷の妹へ

立別れ遠き妹よ
なよびかに針を急ぎて
病む兄に縫ひける小袖
はるはるくくや、相模の山の
朝寒に召させ給へと
書き添へて文もなつかし

かれかれくの軒を掠めて

紅葉吹く風はあれども
ふる里の裏戸の畑の
綿の花、佗しう摘める
小袖着て、日も夜もひとり
湯疲れを暖かう寝る

寝 ざ め

蜜柑の葉わづか黄ばみて
物悲し、相模の國の
山の端に露ぞ降るらし
あかつきの静けき寝ざめ

冬菜蒔くこゝら在所の
軒伏せてなびける夢に
旅人のわれもまじりて

あかつきの静けさ寝どめ

峽の家より

山を見てひとり坐るに
膝瘦せぬ、二階座敷の
ひろくと明るく晴れて
湯上りの粥を啜るも
ことさらに病む身に嬉し
旅すれど、人に馴染めば
湯のひまのそとろ歩さに

鶴鴿や、岩瀬の水の
山裾に碧くひらけし
海の幸、日毎の膳の
獨括の香も病む身に嬉し
旅すれど、人に馴染めば

雪 ふ る 村

山ふもと、刈田も凍る
人はみな家に籠りて
藁せゝる暗き生活の
明暮を雪はちら〜

たま〜くに人死ぬ村の
夕ざれに柩を送る
野の寺へ、遠き田圃の

束ね桑霜に撈がれぬ

淋しさは日にこそまされ

茶の花の寒さに泊めて

瞽女唄の哀れを聞くや

櫓の火に暖もりて寝る

鳥渡る樹々の高さに

陽のうとき麓の村の

風や、風呂焚く煙



明暮を雪はちらく

雪ふる村……………一五一

吾 妻 山

寝られぬ儘に戸に立てば

葉越しの月のおち方の

人の夢路に鳴き急ぐ

空の廣さよ、ほとゝぎす

端山は暗し、繁山の

いるさの雲の白むさへ

うつゝに遠き麓路に

別れて來ぬる旅なれば

笥にあふれ立つ湯煙の

底なる槽たねに沈み居て

うなづく百合の葩はなに

姿見ぬ唄も聞きけんかひに

峽かみの短か夜遅き陽の

寝起きの欄を水めぐる

吾妻山はよきところ